志を高め、上位層がけん引する学校づくりで、全体を底上げ

福岡県 朝倉市立十文字中学校

十文字中学校では、大学キャンパス訪問や検定取得者の表彰などにより高い志を育み、学習意欲を引き出す指導を重視している。向上心の高い学力上位層の意識に働き掛け、けん引役とすることで、学校全体の学力の底上げを図り、県平均を大きく上回る学力向上を実現した。

◉取り組みのねらい

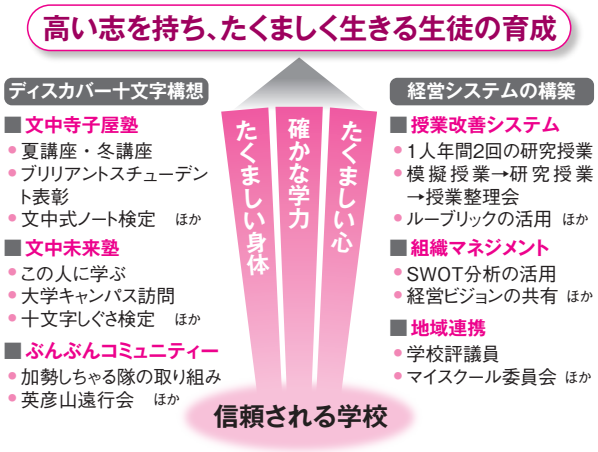
志を高める指導によって「自分でする勉強へ」

十文字中学校は、1学年約50人の小規模校だ。過疎化が進む農村地域に位置し、地域の子どもの数は減少傾向にあるため、毎年全世帯が一律500円の寄付金を同校に寄せるなど、同校に対し、住民は期待を寄せている。

そうした中、同校では2010年度に赴任した佐々木隆良校長の主導の下、独自の学力向上策に取り組んでいる（＊）。その柱は「経営システムの構築」と「ディスカバー十文字構想」だ（図1）。**経営システムの構築**は、教育活動の改善が中心となる。一方、**ディスカバー十文字構想**では、教育課程外の活動による学力向上、志の涵養、地域への愛着や誇りを育む活動が中心となる。自校の良さを発見すると同時に、自分自身を見つめ直し、再発見してほしいという思いが、その名前に込められていると、井手眞理教頭は説明する。

「志を高めない限り生徒は心の底から勉強を頑張ろうと思いません。内発的動機付けが生まれることによって勉強の質が変わり『他人にさせられる勉強』から『自分でする勉強』へと変わっていくのです」

図1　取り組みの全体像



＊同校の資料を基に編集部で作成

＊十文字中学校の取り組みは、本誌 2012 年 Vol.1 の特集でも紹介しています。併せてご覧ください。バックナンバーはベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。http://berd.benesse.jp ＞教育情報＞中学校向け

School Data

◎1977（昭和52）年に開校。2012年度から福岡県の「基礎基本の知識及び技能の定着を図る学校の組織的取組」の指定を受けて、「確かな学力」と「豊かな心」の育成のための改革に取り組む。

校長◎佐々木隆良先生

生徒数◎ 157人　学級数◎ 7学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒838-0023　福岡県朝倉市三奈木 3710

TEL◎ 0946-22-3106

URL◎ http://www.asakura-fko.ed.jp/jumonjichu/

研究発表会◎ 2014年11月27日（木）予定

広がる学力格差への多様な取り組み

◉志を内発的に高める
難関大のキャンパス訪問で「上を目指す意識」を育む

向上心のある学力上位層の意識を更に高めることで、学年・学級全体の雰囲気が引き締まり、中・下位層が引っ張られて学力の底上げを図れるというのが、同校の考えだ。ディスカバー十文字構想のねらいは、その土台となる生徒同士が高め合う環境をつくる点にある。

進路意識の向上に最も成果を上げているのが、「大学キャンパス訪問」（写真1）。2年生12月に行う修学旅行の行き先をあえて東京にし、同校卒業生や朝倉市出身の先輩が通う難関大を訪れる。先輩たちから大学生活や、将来の夢とそのための努力、中学・高校時代の自分について聞くためだ。

写真1　大学キャンパス訪問は、大学主導ではなく、生徒が自由に見て回る。道行く大学生に突撃インタビューをすることもある

13年度は、東京大や東京外国語大、早稲田大などに、1人2校ずつ訪問して先輩の話を聞き、大学の施設や授業を見学した。「中学時代は内気だったけれど、得意科目を頑張り続けたことが自信になった」「友だちからガリ勉と言われたけど、むしろそれを誇りにして頑張った」など、悩みや困難を乗り越えて志望を実現した先輩のリアルな話に、生徒も引率の教員も真剣に耳を傾けるという。

あらゆる学力層に響くのも大学訪問の良さと、研究主任の城戸学吏先生は語る。

「上位層は最先端の研究に触発され、中位層はもっと上を目指して頑張ろうという意識が芽生えてきます。下位層も、大学がどういうところかを知り、大学進学を見据えて、志望の高校を変更する生徒もいます」

2年生全員が訪れるため、訪問先が同校卒業生だけでは足りず、佐々木校長の前任校の卒業生や教員の知人にも当たって協力者を募る。同校出身ではなくても、地元の後輩のためならと、快く引き受けてくれる朝倉市出身の学生は少なくない。

実施時の重要なポイントは、事前の準備や調べ学習の徹底にあると、城戸先生は話す。

「単なる見学に終わらせないためには、事前指導をしっかり行うことが大切です。訪問先の大学や学部の情報を調べるのはもちろん、学生への質問項目を考えさせ、教員が全て確認します。漠然とした質問には、より焦点化するようアドバイスします」

キャンパス見学時には、大学の構内にはどのような掲示物が貼ってあるのか、授業の合間や学食で学生たちはどういう会話をしているのかといったところにも着目させている。

朝倉市立十文字中学校　校長
佐々木隆良　ささき・たかよし
「学校の使命を果たすために、巻き込み、巻き込まれる関係が出来るシステムを構築したい」

朝倉市立十文字中学校　教頭
井手眞理　いで・まり
「我が子を通わせたいと思えるような学校づくりを心掛けていきたい」

朝倉市立十文字中学校
田中　誠　たなか・まこと
主幹教諭。「子どもたちが夢をかなえていけるような環境づくりに力を入れていきたい」

朝倉市立十文字中学校
城戸学吏　きど・がくり
研究主任。「高校受験後を見通して、自分がなりたい、したいことは何かを考えられる生徒を育てたい」

未知の人生に立ち向かう勇気や希望を与える社会人の講話

「この人に学ぶ」は、さまざまな業界の第一線で活躍する社会人を招き、仕事の内容や働く意義などを聞く講演会だ。毎年5月、弁護士や税理士、企業経営者、新聞記者、陶芸家、パティシエなど専門性の高い職種を中心に10人ほどを招き、全学年の生徒が縦割りで2人の講話を選んで聞く。講師は、同校の教員が

人脈をたどり、時にはインターネットで探す。

「以前、ある生徒が講演会の感想で『勉強しなくてもよいと思った』と書いていたのを見て、講師には必ず、その職業に就くまでに努力した道のりを語ってもらっています。どんな職業でも苦労はあります。それが専門性の高い職業ならなおさらです。自分では就けないと今思っているような職業でも、努力次第で道が開けるかもしれない、自分にも出来るかもしれないという希望や勇気を、生徒たちに持ってほしいのです」（佐々木校長）

あるパティシエは「学校に通う200人のうち、パティシエになれるのは2、3人」「海外では語学だけでなく日本文化への理解も大切」と熱く語った。社会で求められる力は何かを職業人からじかに聞くことで、今の学習が将来にどうつながるのか、生徒はおぼろげながらも感じ取り、学ぶ意味を自覚していく。

◉志を外発的に高める

普段話さない校長からの叱咤激励でより高い志望を目指す

志を高めるための手段として、管理職と生徒との対話も重視している。その1つが、3年生の夏休み前に行う校長面談だ。担任による1学期の進路面談が終わると、志望校を記した生徒の個人カルテを基に、佐々木校長が3年生全員と一人ひとり面談をする。ねらいは、生徒の志望校を1ランク上げることだ。志望実現のためにどういう努力をしているのか、何時間学習しているのかという話を聞きながら、「君の力ならもっと伸びる」「最後まで諦めるな」と励ます。合格ラインぎりぎりの生徒には「このまま頑張れば大丈夫」と伝え、安易に志望を下げさせないようにしている。

「1つ上の目標を提示することで、生徒の見えている世界が変わり、学習の仕方そのものが変わることを期待しています。普段接する機会の少ない校長が直接励ますことで、自分を見てくれているという安心感につながり、意欲も湧くと思うのです」（佐々木校長）

毎年1学期に全校で実施する「**十文字しぐさ検定**」も、管理職が直接生徒の志を刺激する場だ。管理職や主幹教諭と面接をし、社会人として必要なマナーや、望ましい言葉遣いなどをチェックする検定である。1年生は初級、2年生は中級、3年生は上級と位置付け、それぞれABCの3段階で評価し、Cの生徒にはB評価になるまで追試を行う。

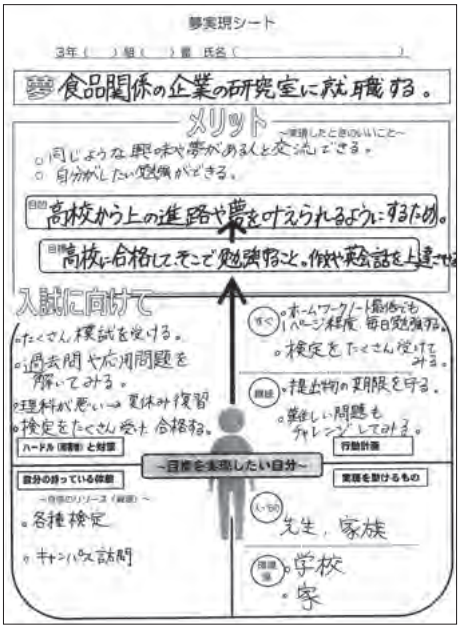
検定では、服装や言葉遣いのチェックは最低限にとどめ、面接の中身を重視する。「スローガンにある目指す文中生の姿を3つ言ってください」「夢や目標は何ですか」「そのために何を頑張っていますか」というように、十文字中生としての心構え、夢の実現に向けての努力を言葉にさせることによって、コミュニケーション能力の向上も図る。

校長や教頭が面接官となるので、生徒だけでなく、傍らで見ている担任も緊張する。井手教頭は、「検定が近くなると、どの学級も担任が中心となって猛特訓をします。担任にとっては、生徒の姿を通して学級運営の質が問われるため、かなりのプレッシャーを感じているようです」と述べる。マナー検定を通して教員の指導力も磨かれていくのだ。

検定取得者の表彰制度により切磋琢磨する集団づくり

教育課程外での学力向上策で特に成果を上

図2　「夢実現シート」



将来の夢や目的、それを実現するために必要なこと、自分を変えた体験などを記入するシートで、進路行事などがある度に年数回書き換えさせる。1年生は漫然と書いている生徒が多いが、2年生の大学キャンパス訪問を契機に、よりレベルの高い高校を志望校にする生徒、「自分の持っている体験（自信のリソース）」の欄に大学訪問を挙げる生徒など、明確な志望を持ち始める生徒が多い　＊同校の資料をそのまま掲載

広がる学力格差への多様な取り組み

げているのが、「検定取得者の表彰制度」だ。各種検定を級ごとにポイント化し、10ポイント以上を獲得した生徒を「ブリリアントスチューデント」として表彰する（写真2）。

「本校のような小規模校では競争が生まれにくいので、絶えず刺激を与えることが重要です。上位層の中には、学校の学習だけでは物足りなさを感じる生徒もいます。そうした生徒の才能を開花させるためにも、全国と競える検定を利用しています」（井手教頭）

中には、1人で4つ、5つもの検定を受ける強者もいる。数だけではなく、高校・大学入試の推薦基準としても通用する準2級・2級などを取得する生徒もいる。頑張っただけの成果が形として表れるところに、生徒はやりがいを感じているという。

最大の効果は、中・下位層の生徒の間に競争意識が生まれることだ。偏差値65前後の集団が資格を取り始めると、必ず60前後の集団が引っ張られて、学年全体が頑張ろうという空気に包まれるという。主幹教諭の田中誠先生は「検定に向けて友だちが学ぶ姿を見て、中・下位層の生徒の中にも『自分も頑張らなければ』という気持ちが芽生えるようです。難易度の低い級から1つずつステップアップできるところが、中・下位層の生徒にも取り組みやすい要因になっていると思います」と分析する。

写真2　英語検定、数学検定、漢字検定、歴史能力検定、ICT プロフィシエンシー検定試験（P検）などを、5級で1ポイント、4級で2ポイントなどと換算し、10ポイント以上を獲得した生徒は、名前と顔写真が、合格した検定と共に掲示される

理想の十文字生をたたえる「文中寺子屋塾大賞」

学校生活のあらゆる面で優秀な生徒には、学年末に「文中寺子屋塾大賞」が贈られる。基準は「品行方正で勉学に励み、十文字中生のモデルとしてふさわしい人物」だ。成績が上位であることはもちろん、検定取得でも実績を挙げ、あいさつや掃除もきちんと出来、学校や友だちのために率先して行動できる。そうした総合的に優秀な生徒を佐々木校長が1、2名選出し、卒業式前日のリハーサルの時に全校生徒の前で表彰する。

生徒たちも意識しており、毎年卒業式が近くなると「今年は誰か」という話題で持ち切りになる。次点には「文中未来塾大賞」が用意され、こちらも成績や生活態度など多様な面を評価して毎年5、6名を選出する。「優秀者は全校生徒の前で褒めたたえ、競争意識を刺激するのがねらい」と佐々木校長は述べる。

◉成果

学年を追うごとに確実に伸びていく生徒の学力

取り組みの成果は、学力に確実に表れている。14年4月の福岡県学力分析テストでは、県平均との差が、1年生と2年生では10点以上、3年生は40点以上上回った。また、外部テストでは、3年生の数学で1年生から学年を追うごとに得点が伸びていた。

「本校のような小規模校でも、他校にはない質の高い取り組みを継続していけば、必ず生徒の学力は伸びるのです。先生方や外部の人材を巻き込みながら教育を展開し、今後も地域の期待に応えられる成果を上げ続けていきたいと考えています」（佐々木校長）

佐々木校長が考える 学力二極化への対応

学力向上の取り組みで大切なのは、一次関数式の $y = ax + b$ でいう、係数 a の数値をいかに上げていくか。入学時の学力（＝b）がそれほど高くなくても、a の数値を数倍に高めることで必ず追い付けると信じています。それと共に大切にしているのが、先生方の主体的な参画です。本校では、週1回、先生方に学級経営や学習指導の取り組みのあり方を点検する「学年・学級バリアフリー」の時間を設けています。双方向の対話により学校全体を活性化させたいと常に考えています。